

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第十二回）

ぼうさいばんか

「亡妻挽歌」大伴旅人」その2

すきた いてゆ

く次田の温泉（現・二日市温泉）く

・奈良時代の政治家であり歌人であった大伴旅人が奈良・平安時代を通じて、九州を統治する拠点として、またわが国の西の守りとしての防衛基地、さらに大陸への玄関口として設置され重要な役割を果たした大宰府の長官（大宰帥）ださいのそちとして着任したのが神亀四（727）年末から翌五年春頃までの間でなかったかと推定されているがその着任後、間もなく最愛の妻を病で失くしている。

・九州には大伴旅人が妻を失くし、悲嘆にくれて詠われた万葉歌がある。

そのうちの一首に福岡県の中部に位置する大宰府市にある大宰府政庁の跡から南へ約3kmの地に今、「二日市温泉」があるが、この温泉に天平2（730）年、妻・大伴郎女おのおとものいらつめに先立たれた大宰帥・大伴旅人が当時、次田の温泉と呼ばれた現在の二日市温泉に宿した時に詠われた次の万葉歌がある。

すきた

いでゆ

「次田（現・二日市）の温泉」

あしたづ

あ ごと

湯の原に 鳴く芦鶴は 吾が如く 妹
に恋ふれや 時わかず鳴く

卷六—961

大伴旅人

（解説）この歌の題詞は「帥大伴郷（旅人）、次田の温泉に宿り、鶴が
音を聞きて作れる歌」とある。

・大宰府に着任後間もなく妻を失って傷心の大伴旅人が次田の温泉で宿している折から、宿舎の付近でかん高く悲壮に鳴く鶴の声を聞いて、孤独の哀愁を一層深くして湯の原に鳴く鶴の姿に自分を重ねて詠んだものと思われる歌一首である。

・歌の意は、「温泉がわく原中で鳴いている鶴は、私と同じように、激しく妻に恋焦がれて時の区別もなく鳴いているのだろうか。」との亡妻大伴郎女を思つての歌であろうとの説がある。

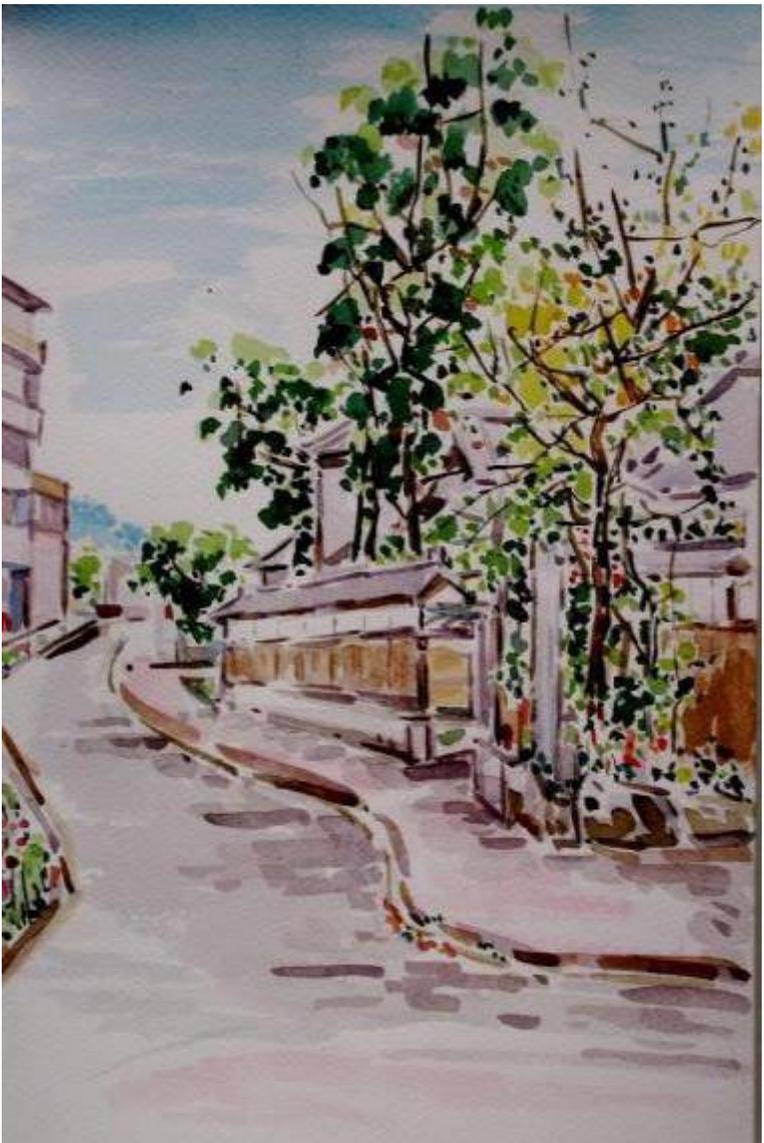
・「次田の温泉は現在の二日市温泉のことと福岡県筑紫野市にあり、筑紫野市資料によると【この温泉の歴史は古く孝徳天皇御代白雉（はくち）四（653）年、二日市温泉の近くにある九州最古のお寺とし

て有名な「武蔵寺」むそうじの創建者である藤原登羅磨ふじわらのとらまるが薬師如来のお告げにより開いたと伝えられる】以前は武蔵温泉と云い次田の湯・薬師の湯・西府（さいふ）の湯等、時代と共に名称が変わり現在は二日市温泉と呼ばれ人々に愛し親しまれてきた。

二日市温泉はかつては博多の奥座敷として多くの湯客で繁栄していたが町の西側に鳥栖とす筑紫野道路と九州自動車道が通り、更にJR鹿児島本線・西鉄天神大牟田線が運行しているため交通の便が良く、このため近年、温泉街にはマンション等の住宅が多く建ち、現在は7軒余りの温泉旅館があるが、福岡のベッタタウン化が著しい。

・JR鹿児島本線二日市駅下車、駅の裏手を西へ約5分程歩くと万葉集で詠われた「次田の温泉」現在の湯町「二日市温泉」がある。

（写生地1）この地には詩文などに親しむ有名な文人墨客ぶんじんぼっかくの来遊により数多くの詩歌が詠まれている。温泉街の湯町本通南端にあり幕末・明治期の公卿・内大臣三条実美さんじょうさねとみがこの地を訪れた際に詠まれた歌碑が建つ旅館大丸別荘旧玄関前から温泉街風景と遠景に佐賀県と福岡県の県境に聳える「基山」きざんを描く。（池田杏花）



☐旅人が次田の温泉に宿りこの歌を詠った理由について二つの説があ

る。一つの説は林田正男著「万葉の歌」には貝原益軒の「筑前国続風

土記」の湯町の条に「癬瘡をいやす功ありて、遠近より来り浴する者

多し」とある。癬瘡は、できもの、たむしの類であるが、旅人は天平

二（730）年六月に「瘡を脚に生し、枕席に疾苦ぶ」（巻四―56

7）とあるように、すねにできものができて、病床で悩み苦しんでい

る。旅人が入湯したのは、その病後の保養のためではなかったか。た

だ、病は六月の事で渡り鳥である鶴が飛来しているか疑問であると述

へている。

・さらにもう一つの説には「次田温泉は、大宰府から約3kmと近距離であるから、旅人をはじめ府の官人達が、しばしばこの温泉に浴して政務の労を癒やしたものであろう。」と伝えられ旅人も政務の慰労の時に詠われた歌であろうとの説があるがはっきりしていないようである。

☐なお、古代にこの温泉に入浴する際の順序が次の歌になっている。

・平安時代の歌集「梁塵秘抄」りょうじんひし抄には次田の温泉（今の二日市温泉）

での入浴の社会的序列を示した歌がある。「すいたのみゆのしだいは、

（次田の御湯の次第は、）一、官（最初に入浴するのは大宰府の高官）

二、丁（次に丁「観世音寺」の僧侶。）三、安楽寺（「太宰府天満宮」

の僧侶。）四、には四王寺（「四王寺」の僧侶。）五、さぶらひ、（大

宰府勤務の武士。）六、ぜんふ（大宰府勤務の料理人。）七、九八丈

（七と八を飛ばして）九、けむ丈（大宰府の高官を護衛する武士。）

十、にはこくぶんのむさしてら（国分寺である武蔵寺の僧侶。）よ

るは過去の諸衆生」。とあることから筑紫豊「九州万葉散歩」には、

この温泉は、「万葉時代においても、大宰府をはじめ、その周辺に^{いらか}豊をならべていた諸官庁諸大寺に属する官人僧俗^{そつぞく}の入湯が盛んであつたと思われる。」と述べている。

(写生地2)

・福田良輔「九州の万葉」には大伴旅人がこの次田の温泉に宿って、「湯の原に鳴く芦鶴は」とよんだ、歌中の原文「湯の原」は、ユノハラとよんで、温泉の出る原の意が通説であるとしているが、次田にある温泉の宿から、その近くの「湯の原」の地で芦鶴が鳴く声を聞いていると解する方が自然であるとし、現在の二日市温泉の地「湯町」の西に隣接する旧・二日市村の小字「湯の原」にはぼあたるだろうと述べ。また、地名の中の「原」は九州地方では「ハル」の読み方であり「小字・湯の原」は「ユノハル」と呼ばれていているが、万葉時代にも「ユノハル」と呼ばれていたと思われると述べている。

小字「湯の原^{ゆ はる}」はJR鹿児島本線「二日市駅」から西南（久留米方面）へ線路沿いの道路を約10分程歩くと筑紫野市の「ふるさと館筑紫野」等の文化施設ゾーンがあるが、この地域一帯をいう。この付近は古くはすすきや芦などが生い茂って広い野原であっただろうと見ら

れているが今は新しい住宅地となり古代の趣はほとんど見ることはできない。水田の残る住宅地から南側正面には旅人が神亀五(728)年に妻を失ったことへの弔間をするため、奈良の都から派遣された弔問使とともに「基肆きい(椽)城」に登り亡き妻を恋いる歌(巻八―1473)を詠った」という歴史を有し、国の特別史蹟である「基肆きい(椽)城跡」がある「基山きざん」と「背振山脈せぶり」を遠景に描く。(池田杏花)



(参考文献) 「九州の万葉」 滝口弘 著 「万葉の歌」 林田正男 著 「大宰府万葉の世界」
前田淑 著 「九州万葉散步」 筑紫豊 著 「大宰府観光協会資料」

・【参考図】

「亡妻挽歌」位置図

～基山・二日市温泉・大宰府政庁跡～

